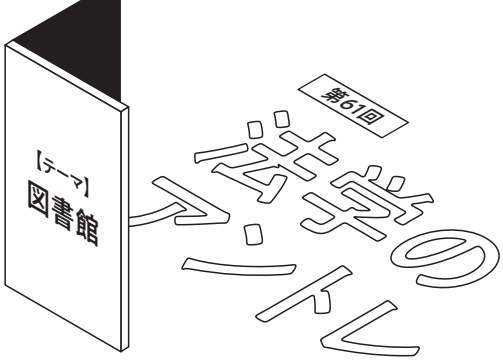

「大学図書館」に行こう

岡山大学教授
原田和往
HARADA Kazuyuki

生活の中の図書館

新型コロナウイルス感染症拡大に翻弄されながらも，無事に小学校の学習発表会をやり遂げた子ども達を労うためにドライブに出かけた。最初に高梁市立図書館に立ち寄った。同館は，2017年に全国4例目となるカルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社を指定管理者として開館した公共図書館である。駅に直結し，年中無休で午前9時から午後9時まで利用できるという利便性に加えて，書店と喫茶店が併設された複合的な施設となっている。訪れた際には，マスキングテープ等の製造・販売を手がける企業によるワークショップが開催されていたこともあって，多くの人で賑わっていた。図書室や近所の書店では目にすることができない様々な本を前に，子どもたちは目を輝かせていた。

読書と昼食を楽しんだ後で，今回の目的地である，吉備川上ふれあい漫画美術館に向かった。「美術館」という名称ではあるが，国内外の漫画約12万冊が所蔵され，展示中の約6万冊は館内で自由に閲覧できるという「図書館」的機能を有する施設である。娘は，お目当ての岡山県出身の漫画家の原画展をみて一生懸命にメモを取り，息子は，妻と一緒に，大きな本棚一杯に揃えられた新旧の漫画をみて，気になるものを探すなどして，楽しい時間を過ごした。

「図書館」をテーマとして本欄の執筆をご依頼いただいたのは，この直後のことである。

数字で見る「図書館」

岡山県には，来館者数と個人貸出冊数において，2005年度から14年連続で，都道府県立図書館の中で日本一となり，現在でも高い人気を誇る県立図書館もある。同館では，ほぼ全ての新刊児童書を購入する一方で，どれほど人気の本でも1冊しか購入せず，幅広く書籍を揃えるという方針が採用されている。また，その閲覧室は，人文科学，社会科学，自然科学・産業等の6部門に分けられ，各部門に専門的知識を有する職員による対応窓口が設けられている。1989年度に2.2冊であった県民1人当たりの貸出冊数は，同館が新たに開館した2004年度に5.26冊，2017年度に6.7冊と増加傾向にある。「図書館」が，我々の生活に与える影響の大きさが示されているといえる。

しかし，県立図書館も，また，私にとって最も身近な存在である「大学図書館」も，財政的には非常に厳しい状況に置かれている。先日，公益社団法人図書館協会から刊行された『日本の図書館の歩み：1993-2017』（2021年）をもとに，この点をみてみよう。まず，県立図書館等が属する「公共図書館」の状況である。館数は，1992年度の2011館に対し，2017年度は3273館と増加している。登録者数・個人貸出数も概ね増加傾向にあり，1992年度の約1860万人・約2億9000万冊に対し，2017年度は約5720万人・約6億9000万冊となっており，「公共図書館」に対する社会の関心の高さが窺われる。他方で，資料費は，1992年度の約300億円に対し，2017年度は約280億円である。僅かな減額にみえるが，館数の増加に加えて，ピーク時（1997年度の約368億円）から減額が続いていることを考えると，財政的に厳しい状況にあるといえる（専任職員数も減少している〔1992年度1万4200人，2017年度1万203人〕）。

次に，「大学図書館」の状況をみてみよう。大学数・大学図書館数（現在は，文部科学省令である大学設置基準が，全ての大学に対し，図書館の設置を求めている〔同36条1項3号〕）は，全体としては増加傾向にある。1992年度の大学数が523校（国立98，公立41，私立384，学生数約247万人）であるのに対し，2017年度は783校（国立86，公立89，私立608，学生数約317万人）である。蔵書数も増加している（1992年約1億9400万冊，2017年約3億3000万冊）。他方，図書受入冊数と資料費は，1992年度の